

カンポン・インプルーブメント・プログラムの歴史と現状からみる

今後の展開に関する考察

日大生産工(院) ○古田 莉香子 日大生産工 山岸 輝樹
 日大生産工 布野 修司 日大生産工 広田 直行

1 研究の背景と目的

カンポン・インプルーブメント・プログラム KIP（以下、KIPとする。）とは、およそ50年前より、インドネシアの大都市を中心に展開されてきた、オン・サイトで居住環境を改善する取り組みである。基本的に住宅そのものの改善は居住者に委ね、道路舗装、上下水道の設置、ゴミ収集などの改善事業を行い、著しい成果を上げてきている。KIPは、さまざまな歴史的過程を経て、現在ではGreen and Cleanと呼ばれるプログラムが積極的に取り組まれている。

本稿では、KIPのこれまでの歴史を振り返ったうえで、インドネシア・スラバヤのKIPの取り組みについて考察する。さらにスラバヤにおいて、グリーン&クリーンが特に積極的に行われている、カンポン・マスパティにおける、居住環境改善の取り組みの具体的な事例を明らかにし、今後の展開についての指針を得ることを目的とする。

1-2 既往の研究

インドネシアの居住環境とその整備手法については布野による「インドネシアにおける住居環境の変容とその整備手法に関する研究－ハウジングシステムに関する方法論的考察－」（1987）があり、本研究の出発点としている。

インドネシアのカンポンに関する研究は、J. Silasとそのグループによる一連の研究^(参9)、また布野によるカンポンの歴史的形成プロセスとその特質「インドネシア都市の生活空間に関する研究(1)」(1992)がある。また、カンポンにおける生産システムの研究については、鎌田らの「インドネシアの住宅生産システムに関する研究 その2：都心部カンポンにおける建築生産システム」(1994)の中で考察している。

さらに、居住環境に関する研究として、中村らによる「高密度居住地カンポンの自発的小さな改善研究(その1)－居住環境改善の手法－」

(2015)や、松永らによる「インドネシア主要都市における居住者の生活の質の影響要因」(2015)においてまとめられている。一方で、KIPの前史についてまとめられ、さらにグリーン&クリーンの取り組みについて、考察されているものはない。

そこで本稿において、KIPについて前史から現在までの取り組みとその課題を明らかにすることは、居住環境についての研究において意義のあることと考える。

1-3 研究方法

本研究は、文献資料よりKIPの歴史や、かつて行われていた政策内容についてまとめる。さらに現地で、現在行われている政策について、特に活動が積極的に行われ、多くのコンテストで受賞歴のある、カンポン・マスパティにおいて、実際の取り組み内容とその実態についてヒアリングを行い、記録をする。

調査は、2017年12月22日～27日に行ったものである。主要参考文献については末尾にあげる通りである。

2 KIPについて

2-1 KIPの歴史

スラバヤのKIPは、1923年にオランダの植民地時代にはじまり、オランダ議会の政治的野党からの倫理の批判に対応するためにはじまっている。当時は、一般にヨーロッパ市民が住んでいるカンポン周辺の生活を保護することを目的とされている。具体的には、下水道、水浴・トイレ施設、ゴミ処理施設の改善、メーター付き水道設備の設置、道路舗装などである。1925年に排水設備を中心に整備が開始する。さらに1925年には住宅議会、1926年にはカンポン委員会報告によって、道路舗装のための補助金が自治体に交付される。しかし、世界恐慌の影響でカンポン改善事業は一時滞る。その後再開さ

A Study on The History and Future Development of Kampung Improvement Program

Rikako FURUTA, Teruki YAMAGISHI, Shuji FUNO and Naoyuki HIROTA

れるのは1930年代末である。

1937年には中央政府はスラバヤ市に予算をFl.80000交付する。さらに翌年、1938年には、カンボン改善委員会が任命され、予算Fl.50万が交付される。スラバヤでは1938年までに、都市カンボンの5分の1が改善され、1939年末には、361ヘクタールが改善される。

その後、1945年8月17日にインドネシアが独立宣言を行う。独立後約20年はカンボンに対して、ほとんど何も政策は行われていない。しかしながらそんな中でも、1950年代半ばには、カンボン居住者による、自発的な改善活動が行われ、それを市当局が支援する試みがなされている。

スラバヤでKIPがフォーマルなかたちで行われ始めるのは、1960年代後半である。まず、1968年にW.R.スプラトマン^(注1)KIPと呼ばれる、それまでのカンボン改善への補助を施策として確立している。これ以降、自治体ベースで開始されたKIPは国家的施策に引き上げられていく。またこれらは、世界銀行や国連などの関心を集め、1974年から、世界銀行からの融資が開始される。(World Bank KIP)世界銀行による融資は、まずジャカルタ(Urban I : 74~76年)に対して行われ、続いて、スラバヤ(Urban II : 77~79年)に対して行われる。さらに、1980年からは(Urban III : 80~83年)、5都市においてKIPが始動する。

この当時のKIPの対象となるカンボンの選定については、洪水の頻度、飲料水の供給状態、衛生設備、住民の健康状態、土地利用の携帯、道路の設置状況、住民組織、カンボンの成立年代、人口密度、世帯収入、カンボンの立地、住宅構造、教育施設の有無、住民の意向などが選定基準として設けられている。

1980年代に入り、KIPは公的住宅供給にシフトをする。しかし1983年~1998年の15年間、一時停止をする^(参6)。その後1990年代末以降、総合的(Comprehensive)KIPと呼ばれる、物理的環境改善だけでなく、職業訓練、小規模事業支援などが行われるKIPが開始する。このプログラムは、環境、経済、社会の強化を掲げたものであり、生活水準の向上が目標とされ、1990年代末の政変ののち、金融危機により中断されるが、2001年に再開され2007年まで続いている。

2-2 グリーン&クリーン KIPについて

総合的KIPの実施以降、カンボンに基づいた、住民参加型のボトムアップ型の施策が展開されている。こうした中で、2005年以降、グリーン&クリーンKIPと呼ばれる環境改善の取り組みが開始される。スラバヤ市は市の標語に“Green and Clean”を掲げ、美化と緑化を進めている。

さらに、スラバヤ市の31すべてのクチャマタン(群)で様々な施設や人を対象としたセミナーが実施され、取り組みに意欲的な市民を環境ファシリテータとして育成し、住民の意欲向上や、環境改善のフォローを行う役割を与え、各カンボンに配置している。また、プログラムの一環として、数多くの環境コンテストを開催し、カンボンの自主的な取り組みを評価するために積極的に取り組みを行うカンボンに対して、表彰を行っている。また、現在のKIPはスラム改善を図る中で、住民参加が条件であり、自ら手を上げ、積極的に取り組みを行うカンボンに対して市から補助金を提供している。

さらに近年では、カンボン内に、公共施設として、児童図書館の設置の義務が求められており、各カンボンで設置が進んでいる。

2-3 カンボン・マスパティの取り組み

マスパティは、350世帯、1350人が居住する、スラバヤの中心部にあるカンボンである。数多くのカンボンでグリーン&クリーンが展開されているが、特にマスパティでは住民による活動が積極的に行われており、環境改善のためにいくつかの機能を用いてゴミゼロや水質改善に取り組んでいる。マスパティはこれらの取り組みで、数多くのコンテストで多くの賞を受賞し、対外的に高い評価を得ている。以下にマスパティでのグリーン&クリーンの取り組みの具体例を挙げる。

A : コンポスト

家庭から出る生ごみを発酵腐熟させ、堆肥化するシステムをカンボン内に導入。タイヤをリサイクルさせて作ったコンポストである。カンボン内にいくつも設置されており、このコンポストの設置により、カンボンのゴミは大幅に減少した結果が出ている^(注2)。さらに、これらの設置により、家庭での衛生に対する意識が高まり、衛生状態が改善、維持されている。また住民はこれらの堆肥を利用し、農産物を栽培・販売し、副収入を得られる機会にもなっている。

B : 水浄化システム

Karbon 炭, batu 石, serabut やし, の3

種類それぞれによって水を浄化している。カンポン内のいたるところに配置されている。カンポンでの排水処理について、ゴミ問題に次いで大きな課題となっているが、コンポストによりゴミ処理問題が徐々に改善される中で、今後排水処理システムが課題となる。

C：緑化

グリーン&クリーンを進める中で、もっとも重要な要素であり、景観に関わる。木を植樹したり、プランターを多く配置させることで緑化を進めている。またコンポストからできた堆肥を用いて、植物を育てている。

D：街路舗装

カンポンの景観の美化をはかるために、住民の手により独自に行われている。舗装するだけでなく、その上にアートを施すことで、カンポンの景観の統一をはかり、美化を進めている。

E：リサイクル

カンポン内で出たゴミを、支援を得ながら、リサイクルを行う。リサイクル後は、バックや財布、傘などの手工芸品が製造され、住民により、こどものおもちゃや、コンテスト参加時の衣装（ドレス）がつけられ、利用されている。

4 KIPの課題と今後の展開

4-1 KIPの諸問題

KIPが注目される理由として、まず、居住者の生活構造を大きく変えない手法であることがあげられる。スクオッター・スラムや不良住宅の問題について、さまざまな対応策がなされているが、クリアランス型の再開発や居住者を強制的に都市郊外や他島へ移住させる、リセトルメントなどは、別の地区に新たなスラムを生み出したり、都心へのUターン現象を引き起こしたりしている。居住者の生活を支える、社会

経済的な構造について、理解を欠いていたからであると言える^(※1)。また投資効果が高く、影響の及ぶ範囲が広いこと、さらに総合的なアプローチであることがあげられる。フィジカルな環境改善だけでなく、教育や医療、職業指導といった各側面からのアプローチが居住者の生活を総合的にとらえており、伝統的な相互扶助組織をベースとして行われているからである^(※2)。またKIPの計画や、その実施プロセスに居住者が積極的に参加することを前提として行われていることも注目される点といえる。

一方で、さまざまな取り組みが行われることで、問題点も多くある。以下にその問題点をあげる。

・物的環境の問題

フィジカルな環境改善は大きな成果を上げてきたが、都市全体にわたる、インフラの問題は、カンポン内でのみ解決することは不可能であり、より上位計画が必要とされている。まず上下水道について、そもそもカンポンの衛生状態が極めて悪い大きな要因として、下水道システムが完備されていないことがあげられる。また、ごみ処理については全体システムが完備されておらず、衛生悪化の大きな要因である。

また、カンポン内において、コミュニティのための施設や、オープンスペースが極めて貧困である。再開発過程、さらにハウジングシステムの確立のためにも豊かなオープンスペースを設けることが課題であるといえる。

・経済社会環境の問題

KIPはコミュニティ・オーガニゼーションを含め、各種公的機関が総合的に生活改善を行うことが基本である。コミュニティ・オー



図1 カンポン・マスパティの取り組み

ガニゼーションについては、計画過程への住民参加については大きな成果をあげているが、経済生活の改善については弱い。

・居住環境の維持管理の問題

KIPによって改善されたカンポンも、その住居環境を維持、管理するシステムがなければ、再び環境悪化または再スラム化の可能性がある。維持管理システムの手法を構築することが大きな課題であるといえる。

・都市周縁カンポンの問題

農村から都市への流入人口を吸収しているのが、都市周縁カンポンである。いわゆる J ターン現象。都市部のカンポンの急激な都市化が深刻な問題となる中で、都市部から、都市部周縁への移動もみられ、都市部だけでなく、都市周縁部への対応もまた考慮される必要がある。

・ハウジングシステムの問題

基本的に住宅の改善は、居住者自身に委ねられている。そのために引き起こされる問題も考えられる。そこで、何らかのガイドラインや、ハウジングシステムを支える仕組みが必要となる。

4-2 今後の展開とまとめ

KIP が施策として、大きな位置づけを持ち、評価を受けてきたのは、他の施策と比較して、大きな有効性を認められたからである。また、インドネシアの KIP は、世界銀行の融資を経て都市貧困層の生活欲求に対する、もっとも成功したアプローチの例として言及される。

今後さらなる取り組みの発展が期待される中で、全体性のあるプログラムが求められる。しかし一方で、各カンポンの現状に合わせた将来計画も必要であり、規模に合わせた詳細なプログラム編成が展開されることが望まれる。また、現在のKIPは自ら手を上げ、積極的に取り組みを行うカンポンに対して市から補助金を提供しているが、地方のカンポンはいまだにその住環境は劣悪であり、政策が浸透していない。そういったカンポンに対して、市からアプローチする方法も検討すべきである。

「注」

注1 スラバヤ出身のインドネシア国家を作曲した作曲家にちなんで命名された。

注2 「インドネシア・スラバヤ市における生ごみ堆肥化事業とアジアへの普及・拡大に対する支援」,財団法人地球環境戦略研究機

関北九州アーバンセンター政策研究員,D.G.J.Premakumara (2012.3)

注3 カンポンのコミュニティをそのままベースとして置かれ、伝統的な共同体組織や文化が生きづき、一つの全体性をもったコミュニティを維持しているのがカンポンであり、最大の要素である。

「参考文献」

- 1) 布野修司『インドネシアにおける住居環境の変容とその整備手法に関する研究－ハウジングシステムに関する方法論的考察－』学位請求論文(東京大学),1987
- 2) 布野修司(1992)「カンポンの歴史的形成プロセスとその特質 インドネシア都市の生活空間に関する研究(1)」,日本建築学会計画系論文集,第74巻,第433, pp.85-94,1992.3
- 3) 平野敏彦, 布野修司, 太田邦夫, 上杉啓, 前田尚美, 内田雄造, 浅井賢治, 勝瀬義仁, (1985)「東南アジアの住居と居住環境に関する研究その27-カンポンの変容過程とKIPの評価その5 Kampung Sawahan」日本建築学会学術講演梗概集,No.5060, pp119-120,1985.9
- 4) 松永健志, 久保田徹, 西名大作, ハンソン E.クスマ, ウセプ スラマン, 「インドネシア主要都市における居住者の生活の質の影響要因」日本建築学会環境系論文集,第80巻,第711号,pp 471-480,2015.5
- 5) 中村航, 内田久美子, 室町亜弥, 稲垣淳哉, 日詰博文, 古谷誠章, (2015)「高密度居住地カンポンの自発的な小さな改善研究(その1)－居住環境改善の手法－」日本建築学会学術講演梗概集 No.5619,pp1237-1238,2015.9
- 6) The CLEAN & GREEN KAMPUNGS of SURABAYA - Kampung Improvement Programme supporting Housing by People Nonenber 1991, Final Submission for the World Habitat Award 1991
- 7) RESPONDING TO THE CENTURY Planning and Revitalization of Surabaya Kampung, City Development Planning Board, Pemerintah Kota Surabaya. 2017
- 8) Laboratoium Perumahan & Permukiman Jurusan Arsitektur (2006),
- 9) Prof.Ir.Johan Silas Sebuah Kenangan masa tugas 1965-2006, FTSP ITS